

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：34425

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26503016

研究課題名(和文)感情表現における非言語チャンネルの利用に関する比較文化論的研究

研究課題名(英文)A comparative cultural study on the use of nonverbal channels in the emotional display

研究代表者

曹 美庚 (CHO, Mikyung)

阪南大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30351985

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：非言語チャンネル使用の観点から、身体接触度合いに関する日韓比較研究を行い、親しい相手との身体接触度合い、および過去の身体接触経験に対する認知度のいずれにおいても、韓国の方が日本より有意に高いことを確認した。この結果は、文化内在化の表れといえる。また、感情伝達に用いられる複数の非言語チャンネルには優先性があり、感情ごとに主チャンネルが異なることを検討した。実験結果から、感情ごとに異なる主チャンネルが存在することや、タッチ・チャンネルの使用度合いに日韓差があることが示された。有効な異文化コミュニケーションのためには、感情伝達における主チャンネルの存在、およびタッチ・チャンネル使用行動への理解が求められる。

研究成果の概要(英文)： From the viewpoint of nonverbal channel use, a comparative study on the level of touch between Japan and Korea was conducted. The results indicated that the touching behavior between intimate relations was used significantly more, and the perception level of touch experience was significantly higher in Korea than in Japan. These results could be seen as signs of cultural internalization in the process of growing. The preferential use of nonverbal channels in the communication of emotions was also investigated. Different preferential channels for different emotions were the case in both Japan and Korea. Adequate understandings about the preferential channels for different emotions and the behavior of touch channel use are essential for a successful cross-cultural communication.

研究分野：心理学

キーワード：感情伝達 非言語コミュニケーション 主チャンネル 感情コミュニケーション 異文化コミュニケーション 普遍性 比較文化 日韓比較

1. 研究開始当初の背景

対人コミュニケーションにおける情報や感情の伝達には、言語のみならず非言語コミュニケーションが重要な役割を果たしている。とりわけ、感情の伝達においては、顔の表情や姿勢などの非言語チャネルが言語よりも有効なコミュニケーション手段となりうることが多い。人々の様々な感情はどのような非言語チャネルによってより有効に伝わるのか。一方、非言語チャネルの1つとされる身体接触については、接触文化と非接触文化の間で身体接触の度合いに相違がある。そこで、本研究では、感情伝達と優先的非言語チャネルの関係 (App et al., 2011) の検証に加え、タッチ・チャネルに焦点を合わせ、感情伝達における文化の影響を検討する。

2. 研究の目的

本研究では、親密化を促進する肯定的な身体接触に注目し、接触行動における日韓間の違いを考察するとともに、発達の観点およびコミュニケーションの観点からその相違について検討を行う。さらに、感情表現における非言語行動の日韓比較研究を行った。感情伝達の普遍性との関連では、コミュニケーション送信者が異なる感情を伝達する際に、もっとも選好すると回答したチャネル (認知的選好チャネル) と各感情を伝達する際に実際にもっとも多く用いたチャネル (行動的主チャネル) が一致するのかに焦点が置かれる。非言語チャネルの使用と文化との関連では、日韓のコミュニケーション送信者が感情伝達においてタッチ・チャネルをどの程度使用するのか使用度合いにおける日韓差の存在を明らかにし、文化の影響を検討している。

3. 研究の方法

調査1 日本の2つの大学と、韓国の4つの大学の学部生を対象に、質問紙調査を行った。日本202名 (男子98名、女子104名、平均

年齢 = 19.55 歳, $SD=1.17$), 韓国212名 (男子96名、女子116名、平均年齢 = 21.18 歳, $SD=1.74$) を分析対象とした。

身体接触を「日常生活の中で行われる悪意をもたない身体接触、すなわち、なでたり、さすったり、軽く触れたり、手を握ったり、腕や肩を組んだり、握手やハグをするなどの肯定的な接触」に限定した上で調査を行った。否定的な接触あるいは偶発的な接触を含まない、親密表現としての身体接触のみを調査対象とした。身体接触の対象者を、自分の父親、母親、同性親友、異性親友の4者に限定し、身体各部位ごとに過去1年間どの程度の肯定的接触の授受を行ったかについて尋ねた。本調査では、各対象者の身体部位ごとの接触の有無に加え、接触の頻度 (少中多) をも測定し、それを各部位ごとの接触頻度得点とした。調査に用いた身体図は、「自分から各対象者への接触」、「各対象者から自分への接触」の計8つのケースを別々のシートにし、カウンターバランスがとれるよう配慮した。

調査2 調査1の対象者に、自分の父親、母親、同性親友、異性親友といった相手から、幼児期から現在に至るまでの発達段階においてどの程度の接触を受けたか (接触経験) を自己評定で、10段階で回答を求めた。

調査3 コミュニケーション送信者の感情伝達に焦点を当て、感情伝達時の行動的非言語チャネルの使用を調べた。恥・誇り・罪悪・当惑・悲しみ・恐怖・嫌悪・怒り・喜び・愛・同情の11感情に「感謝」を追加し、12の感情を用いた実験で、日本119名 (男38、女81, $M=19.48$ 才, $SD=1.13$), 韓国123名 (男60、女63, $M=20.52$ 才, $SD=1.84$) を分析した。

感情伝達の受け手反応をコントロールした相手として実物大の男女のマネキンを用いた。マネキンは、手触りが柔らかいウレタン素材で、目や口がなく感情的に中立的な顔立ちで、すべての関節がフレキシブルなもの

で、カジュアル服装で自然さを演出させた。

実験室入室前に、参加者に実験流れを説明し、実験過程の録画や画像分析の使用許可を得た。実験室入室後、マネキンを恋愛関係にある人以外で自分と親しい関係にある人に見たてるよう指示し、その人の性別、年齢、実験参加者との関係などの個人情報報告させ、マネキンと簡単なやりとりを行わせた。

マネキンから75cm離れた位置から感情伝達を開始し、一つの感情に対して3秒以上かけた感情伝達を求め、感情伝達方法には正解や不正解は存在せず、声が使えない以外は、開始位置から自由に動きながらどのような表現方法も可能であると伝えた。実験中、カメラ1は、正面から参加者の顔に焦点を合わせた上半身を、カメラ2は側面からの体全体の動きを撮った。また、参加者が周囲の目を気にせず自然に感情伝達できるよう、実験者はスクリーン・カーテンの裏で待機した。

実験実施に先立って実験感情とは無関係の3つの感情（混乱・称賛・欲求不満）について、事前に録画された動画を用いて感情伝達を例示した。参加者自身がエンターキーを押すと、パソコンの画面上に12の感情語がランダムに提示され、各感情伝達を行った直後に、当該感情をどの程度うまく伝えられたと思うかを5件法で自己評定させ、感情伝達度を測定した。実験終了後、各感情別に一つのチャンネルのみで当該感情を伝達するとしてらどのチャンネルを選択するかを調べ、感情ごとの認知的選好チャンネルを確認した。

4. 研究成果

日本と韓国の大学生を対象に、親しい相手との身体接触について調査し、身体接触度（接触頻度得点の合計点）、部位別接触率、部位別接触頻度得点、発達段階別接触経験度といった4つの指標を分析した。その結果、父親、母親、同性親友からの身体接触では、韓国のほうが日本を有意に上回っており、部位別接

触率も、両親からは頭部と胴体・上肢を中心とした多くの部位において、同性親友からは男子は胴体・上肢と後頭部において、女子は胴体・上肢と脚を中心とした多くの部位において、韓国の接触率が有意に高かった（Table 1, Table 2）。異性親友からの身体接触は、女子の場合、性的部位を中心に日本の接触率が有意に高いなど、他の対象者からの身体接触とは異なる様相を呈しており、身体接触の意味合いが他と異なっている。

Table 1 身体部位別の接触率および接触頻度得点の日韓比較（男子）

区分	部位	父親		母親		同性親友		異性親友	
		日	韓	日	韓	日	韓	日	韓
頭部	前頭	4.08 (1.50)	18.75 ** (1.33)	8.16 (1.00)	47.92 *** (1.39)	13.27 (1.46)	15.63 (1.13)	49.23 (1.97)	60.56 (1.74)
	後頭	5.10 (1.80)	29.17 *** (1.50)	11.22 (1.09)	43.75 *** (1.52)	20.41 (1.15)	33.33 * (1.38)	49.23 (1.66)	56.34 (1.68)
	側頭	8.16 (1.25)	27.08 ** (1.50)	9.18 (1.11)	22.92 ** (1.50)	26.53 (1.39)	37.50 (1.53)	40.00 (1.65)	52.11 (1.49)
胴体・上肢	前肩	15.31 (1.47)	51.04 *** (1.43)	24.49 (1.13)	48.96 *** (1.36)	36.73 (1.22)	61.46 ** (1.59)	46.15 (1.57)	63.38 * (1.71)
	後肩	8.16 (1.38)	36.46 *** (1.29)	12.24 (1.17)	44.79 *** (1.42)	20.41 (1.20)	43.75 *** (1.48)	40.00 (1.62)	56.34 (1.78)
	腕	5.10 (1.40)	36.46 *** (1.37)	11.22 (1.36)	50.00 *** (1.38)	31.63 (1.39)	57.29 *** (1.46)	60.00 (1.80)	70.42 (1.92)
性的部位	前腕	6.12 (1.33)	29.17 *** (1.39)	10.20 (1.40)	45.83 *** (1.55)	23.47 (1.44)	55.21 *** (1.43)	55.38 (1.86)	81.69 ** (1.93)
	手	9.18 (1.44)	52.08 *** (1.60)	16.33 (1.31)	72.92 *** (1.71)	34.69 (1.47)	55.21 ** (1.53)	64.62 (2.21)	84.51 ** (2.33)
	首	4.08 (1.25)	10.42 (1.50)	4.08 (1.00)	11.46 (1.46)	15.31 (1.33)	19.79 (1.21)	33.85 (1.73)	38.03 (1.63)
脚	胸	2.04 (1.00)	9.38 * (1.00)	3.06 (1.00)	8.33 (1.13)	17.35 (1.29)	15.63 (1.13)	38.46 (1.92)	32.39 (1.74)
	腰	3.06 (1.00)	10.42 * (1.10)	4.08 (1.75)	21.88 *** (1.29)	14.29 (1.43)	23.96 (1.22)	33.85 (1.82)	40.85 (1.76)
	股	1.02 (1.00)	0.00 (-)	1.02 (1.00)	1.04 (1.00)	8.16 (1.50)	7.29 (1.43)	33.85 (1.91)	22.54 (1.81)
尻	尻	3.06 (1.00)	8.33 (1.13)	5.10 (1.40)	27.08 *** (1.35)	15.31 (1.33)	17.71 (1.06)	30.77 (1.75)	26.76 (1.68)
	大腿	1.02 (1.00)	8.33 * (1.38)	5.10 (1.20)	8.33 (1.25)	9.18 (1.33)	9.38 (1.11)	27.69 (1.83)	32.39 (1.57)
	下腿	3.06 (1.67)	8.33 (1.13)	4.08 (1.00)	9.38 (1.11)	7.14 (1.43)	4.17 (1.00)	23.08 (1.80)	19.72 (1.50)
脚	膝	2.04 (1.50)	10.42 * (1.50)	2.04 (1.00)	8.33 * (1.13)	7.14 (1.43)	6.25 (1.00)	23.08 (1.73)	22.54 (1.50)
	足	2.04 (1.00)	5.21 (1.00)	4.08 (1.25)	14.58 * (1.43)	6.12 (1.50)	2.08 (1.00)	21.54 (1.79)	18.31 (1.46)

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注) 各部位ごとに、上段の数値は各対象者からの接触率（接触有りと回答した人の割合、%）を示し、下段の（ ）内の数値は接触有りと回答した人の接触頻度得点（少=1, 中=2, 多=3）の平均値を示す。

また、接触有りと回答した人のみを対象とした部位別接触頻度得点の比較では、とりわけ母親からの接触頻度得点において頭部と胴体・上肢を中心に有意差が見られ、部位別接触率と併せて考慮すると、韓国の大学生は自分の母親からより多くの身体部位に、より頻繁に接触を受けていることが分かる。また、韓国男子は同性親友の肩により頻繁に接触し（Table 1）、韓国女子は同性親友とより頻繁に手をつないだり、腕を組む様子も示された（Table 2）。逆に、日本女子は、異性親友から

頭部と性的部位を中心に頻りに接触を受けている様子がうかがえる。一方、身体接触度において、日本は、父親<母親<同性親友<異性親友の順となり、友人に重きが置かれているのに対し、韓国は、父親<同性親友<母親の順となっており、青年期においても同性親友より母親からの身体接触度が高く、母親との絆の強さが表れた。

日本に比べ韓国の大学生の方が、その両親や同性親友との間で身体接触度が有意に高く、身体各部位に対する接触率も有意に高いことから、韓国では、親しい相手との間で、自分の内面を伝え合う表現方法として身体接触をより積極的に用いる傾向があるのに対し、日本では、自分の内面を伝え合う際に、身体接触による表現を控え、代替的な方法によって表現している可能性が高い。

Table 2 身体部位別の接触率および接触頻度得点の日韓比較 (女子)

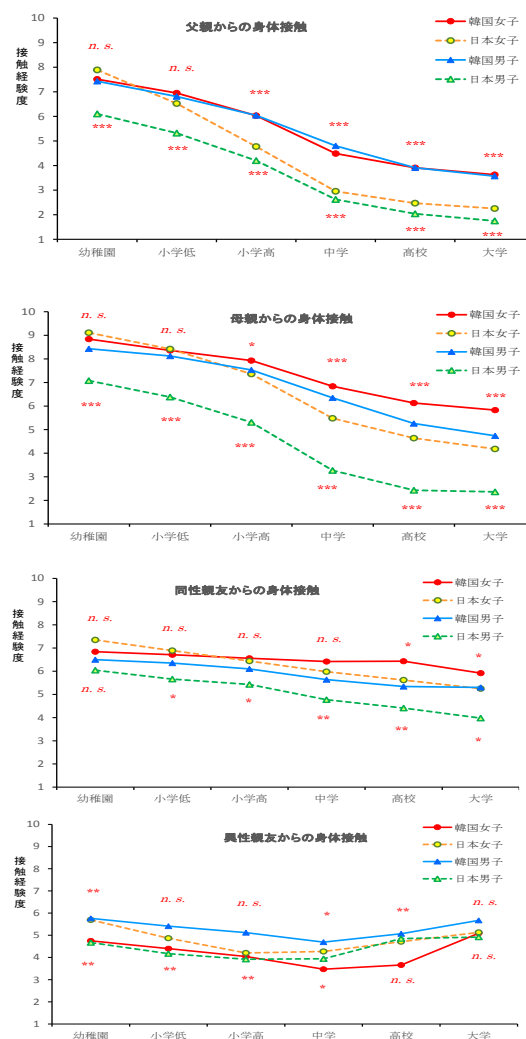
区分	部位	父親		母親		同性親友		異性親友	
		日	韓	日	韓	日	韓	日	韓
顔	顔	6.73 (2.00)	27.59 *** (1.44)	26.92 (1.21)	58.62 *** (1.68) ***	25.00 (1.39)	47.41 ** (1.36)	57.14 (2.00)	61.64 (1.96)
	前頭	25.96 (1.56)	47.41 ** (1.44)	54.81 (1.29)	63.79 (1.60) **	44.23 (1.44)	56.90 (1.50)	64.29 (2.13)	71.23 (1.81) *
	後頭	21.15 (1.59)	54.31 *** (1.44)	43.27 (1.29)	56.90 * (1.70) **	41.35 (1.47)	51.72 (1.58)	65.71 (2.26)	68.49 (1.82) **
前肩	前肩	10.58 (1.36)	15.52 (1.56)	26.92 (1.54)	31.03 (1.47)	28.85 (1.57)	31.03 (1.64)	51.43 (1.69)	45.21 (1.70)
	後肩	23.08 (1.46)	50.00 *** (1.35)	43.27 (1.44)	59.48 * (1.65)	37.50 (1.49)	62.93 *** (1.69)	54.29 (1.79)	65.75 (1.94)
	背中	10.58 (1.27)	42.24 *** (1.43)	31.73 (1.39)	67.24 *** (1.65) *	32.69 (1.38)	56.90 *** (1.65)	52.86 (1.84)	54.79 (1.83)
上腕	上腕	20.19 (1.33)	32.76 * (1.50)	48.08 (1.44)	62.07 * (1.78) *	58.65 (1.57)	76.72 ** (1.75)	64.29 (1.73)	69.27 (1.91)
	前腕	18.27 (1.26)	47.41 *** (1.56)	50.00 (1.56)	81.90 *** (1.93) **	65.28 (1.54)	87.07 *** (1.94) ***	64.29 (1.89)	76.71 (1.98)
	手	16.35 (1.47)	63.79 *** (1.72)	50.96 (1.60)	84.48 *** (2.10) ***	55.77 (1.53)	87.93 *** (1.96) **	72.86 (2.28)	73.97 (2.44)
首	首	4.81 (1.60)	11.21 (1.31)	10.58 (1.46)	23.28 * (1.33)	4.81 (1.40)	19.83 ** (1.26)	41.43 (1.66)	39.73 (1.55)
	胸	0.00 (-)	0.86 (1.00)	3.85 (1.00)	8.62 (1.50)	10.58 (1.27)	11.21 (1.46)	45.71 (2.25)	19.18 ** (1.71) *
	性的部位	0.96 (1.00)	6.90 * (1.38)	12.50 (1.39)	36.21 *** (1.48)	16.35 (1.29)	32.76 ** (1.40)	48.57 (1.88)	30.14 * (1.73)
股	股	0.00 (-)	1.72 (1.50)	1.92 (2.50)	6.03 (1.29)	0.00 (-)	1.72 (2.50)	40.00 (2.14)	13.70 *** (1.20) ***
	尻	4.81 (1.20)	10.34 (1.33)	9.62 (1.10)	41.38 *** (1.67) **	6.73 (1.29)	27.59 *** (1.56)	34.29 (2.13)	21.92 (1.50) **
	大腿	2.88 (1.67)	6.90 (1.63)	11.54 (1.42)	28.45 ** (1.30)	4.81 (1.20)	15.52 * (1.33)	44.29 (1.87)	23.29 ** (1.65)
下腕	下腕	4.81 (1.20)	15.52 * (1.50)	14.42 (1.27)	31.90 ** (1.41)	0.96 (1.00)	12.07 ** (1.36)	27.14 (1.53)	23.29 (1.82)
	膝	2.88 (1.33)	11.21 * (1.46)	7.69 (1.38)	20.69 ** (1.33)	2.88 (1.00)	11.21 * (1.15)	28.57 (1.65)	21.92 (1.69)
	足	3.85 (1.00)	19.83 *** (1.48) **	10.58 (1.36)	25.86 ** (1.30)	0.96 (1.00)	9.48 ** (1.18)	21.43 (1.67)	19.18 (1.64)

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

注) 各部位ごとに、上段の数値は各対象者からの接触率(接触有りと回答した人の割合, %)を示し、下段の()内の数値は接触有りと回答した人の接触頻度得点(少=1, 中=2, 多=3)の平均値を示す。

次に、発達段階別の接触経験度においては、男女間で異なる様相を呈し、女子の場合、小学低学年期までは両親や同性親友からの接触に日韓差は見受けられず、両国ともに高い身

体接触が行われている。しかし、小学高学年を境に、両親からの接触には日韓間で有意差が出始め、高校時代からは同性親友からの接触にも有意差が見られる。反面、男子の場合は、両親からの接触には幼稚園期から日韓差が表れ、同性親友からの接触についても小学低学年から日韓差が見受けられる。しかも、異性親友を除いた父親、母親、同性親友からの接触においては、男女ともに発達段階のある時点で一度有意差が出ると、その差がその後も持続するという特徴を示した。



注) 各発達段階別に、グラフ上部のアスタリスク (*) と n.s. は女子の日韓差の有無を示し、グラフ下部のアスタリスク (*) と n.s. は男子の日韓差の有無を示す。* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

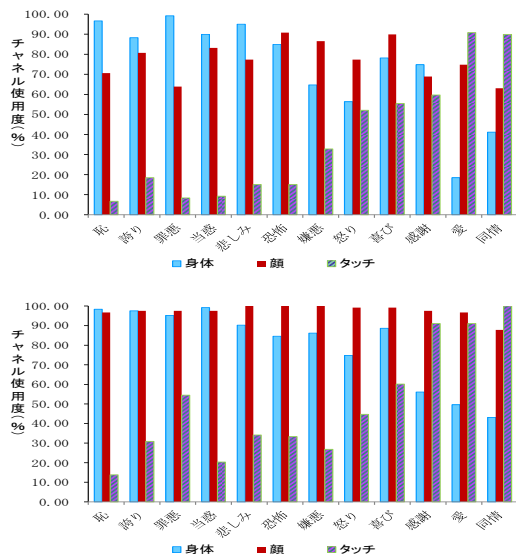
Figure 1 身体接触経験度の発達の变化

以上の結果から、異性親友を除けば、概ね韓国の方が日本より身体接触の度合いが高く、母親からの接触においてはとりわけその程度

が顕著であることが分かる。また、特に女子において、小学低学年までは両親や同性親友からの接触経験度に日韓差は認められないが、その後の発達段階において有意差が表れ始めるという分析から、日韓で身体接触の位置付けや意味合いが異なり、その違いを個人が成長とともに文化規範として内在化した結果、日韓間で有意差が表れたものと推察される。

身体接触の発達的变化の相違は、成長過程で内在化した文化規範を反映したものと解釈できる(Figure 1)。異文化理解の促進と有効な異文化コミュニケーションのためには、文化による身体接触行動の相違を十分理解する必要がある。

次に、各感情伝達において認知的に選好されるチャネルの調査と感情伝達の実験調査(行動的チャネル使用)の結果から、日本と韓国のいずれにおいても、感情ごとに異なる主チャネル(行動的チャネル使用)が存在することが明らかとなった(Figure 2, Figure 3)。



注) 感情ごとに3つのチャネル使用度の平均値を割合(%)の形で表したものである。

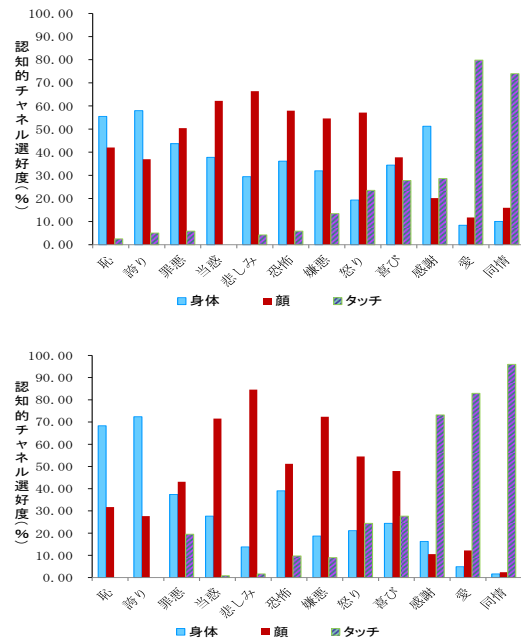
Figure 2 感情ごとの非言語チャネルの使用度(上段日本, 下段韓国)

認知的な選好チャネルは、「愛、同情」の感情伝達においては日韓ともにタッチ・チャネルを選好される割合が高く、「恥、誇り」の感情伝達においては身体チャネルが選好され、「怒り、悲しみ、嫌悪、恐怖、罪悪、当惑」の

感情伝達においては顔チャネルを選好する割合が高かった。「感謝」の感情伝達においては、日本は身体チャネルが、韓国ではタッチ・チャネルが選好され、日韓の間に認知的な選好チャネルの類似性と相違点が明らかとなった。

感情の伝達実験においては、日本の場合、「罪悪、恥、悲しみ」では身体チャネルが、「嫌悪、怒り、喜び」では顔チャネルが、「愛、同情」ではタッチ・チャネルが主チャネルとして優先的に使用されていた。一方、韓国の場合は、「悲しみ、恐怖、嫌悪、怒り、喜び」では顔チャネルが、「同情」ではタッチ・チャネルが主チャネルとして用いられ、「罪悪、恥、誇り、当惑」においては、身体チャネルと顔チャネルの二つが、「感謝、愛」においては顔チャネルとタッチ・チャネルの二つのチャネルが優先的な主チャネルとして使用されていることが明らかとなった。

このような結果は、感情伝達における非言語チャネルの使用様態には、文化的普遍性と文化特異性の両側面が存在することを示唆するものである。



注) 感情ごとに1つの選好チャネルを選択させた結果(%)を示す。

Figure 3 感情ごとの非言語チャネルの選好度(上段日本, 下段韓国)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

①曹美庚・釘原直樹 (2017). 「文化、性、パーソナリティがタッチ性向に及ぼす影響」, 『心理学研究』, 第 88 卷 3 号, (印刷中), 日本心理学会, 査読有, doi.org/10.4992/jjpsy.88.16322.

②曹美庚・釘原直樹 (2017). 「親しい相手との身体接触に関する日韓比較研究」, 『応用心理学研究』, 第 43, (印刷中), 日本応用心理学会, 査読有.

③曹美庚 (2016). 「パーソナリティ特性とタッチング行動の関連性に関する研究」, 『阪南論集社会科学編』, 第 51 卷 2 号, pp.81-90, 阪南大学, 査読無.

④曹美庚 (2016). 「身体接触における日韓比較」, 『阪南論集社会科学編』, 第 51 卷 3 号, pp.263-274, 阪南大学, 査読無.

⑤曹美庚・釘原直樹 (2016). 「日韓大学生のパーソナリティがタッチ性向に及ぼす影響」, 『日本社会心理学会第 57 回大会発表論文集』, p.103, 日本社会心理学会, 査読有.

⑥曹美庚・釘原直樹 (2015). 「身体接触行動の日韓比較」, 『異文化コミュニケーション学会第 30 回大会論文集』, p.3, 異文化コミュニケーション学会, 査読有.

⑦曹美庚・釘原直樹 (2015). 「日韓大学生の身体接触行動に関する比較研究」, 『日本社会心理学会大会発表論文集』, p.8, 日本社会心理学会, 査読有.

⑧曹美庚・釘原直樹 (2015). 「身体接触行動の異文化比較」, 『日本心理学会大会発表論文集』, p.297, 日本心理学会, 査読有.

⑨曹美庚・釘原直樹 (2014). 「感情コミュニケーションと非言語チャネル—日本人大学生を対象にした感情表示の分析を中心に」, 『日本社会心理学会大会発表論文集』, p.275, 日本社会心理学会, 査読有.

⑩曹美庚・釘原直樹 (2014). 「感情コミュニケーションと非言語チャネル—韓国人大学生を対象にした感情表示の分析を中心に」, 『日本心理学会大会発表論文集』, p.282, 日本心理学会, 査読有.

[学会発表] (計 6 件)

①曹美庚・釘原直樹 (2016.09.18). 「日韓大学生のパーソナリティがタッチ性向に及ぼす影響」, 日本社会心理学会第 57 回大会, (於・関西学院大学) (9 月 17-18 日).

②曹美庚・釘原直樹 (2015.11.01). 「日韓大学生の身体接触行動に関する比較研究」, 日本社会心理学会第 56 回大会, (於・東京女子大学) (10 月 31-11 月 1 日).

③曹美庚・釘原直樹 (2015.9.23). 「身体接触行動の異文化比較」, 日本心理学会第 79 回大会, (於・名古屋大学名古屋国際会議場) (9 月 22-24 日).

④曹美庚・釘原直樹 (2015.9.19). 「身体接触行動の日韓比較」, 異文化コミュニケーション学会第 30 回大会, (於・桜美林大学) (9 月 19-20 日).

⑤曹美庚・釘原直樹 (2014.7.27). 「感情コミュニケーションと非言語チャネル—日本人大学生を対象にした感情表示の分析を中心に」, 日本社会心理学会第 55 回大会, (於・北海道大学) (7 月 26-27 日).

⑥曹美庚・釘原直樹 (2014.9.12). 「感情コミュニケーションと非言語チャネル—韓国人大学生を対象にした感情表示の分析を中心に」, 日本心理学会第 78 回大会, (於・同志社大学) (9 月 10-12 日).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

曹美庚 (CHO, Mikyung)
阪南大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号 : 30351985